

# 經濟論叢

第145卷 第5・6号

---

## 哀 辞

故前川嘉一名誉教授遺影および略歴

アリストテレスの表券貨幣説 (2)……………	本 山 美 彦	1
標準商品の考え方をマルクスの問題に 応用する可能性について (2)……………	岡 敏 弘	21
費用削減投資と参入阻止行動……………	林 田 修	35
N人非協力交渉ゲームについて……………	湯 本 祐 司	50
両大戦間期における地方有力銀行……………	東 憲 弘	67
顧客情報の集積・利用と経営戦略の再編……………	西 山 賢 一	97

## 追 憶 文

前川嘉一先生のお仕事と思い出……………	菊 池 光 造	120
前川嘉一先生の思い出……………	赤 岡 功	124

---

平成2年5・6月

京 都 大 学 経 済 学 會

追憶文

前川嘉一先生のお仕事と思い出

菊池光造

私が前川先生に初めてお会いしたのは、1958年の経済学部第7教室であった。もっともそれは、先生の社会政策論特別講義の教室においてであり、教壇で講義される先生を、1受講学生として見上げたという方が正しいであろう。その当時経済学部では、故岸本英太郎先生が社会政策論の講義を担当され、前川先生は助教授として、外国経済書講読（英語）と社会政策論の特別講義を担当されていた。今から思えば、当時の前川先生は36才の若い助教授だったわけで、若々しい顔に青い髭剃り跡を見せながら、熱っぽくイギリスの新組合主義運動と標準8時間労働制度の成立について、またイギリスにおける最低賃金制度の沿革について講義をされていた。私は、労働問題に関心を持つ学生として先生の講義を聞いたわけだが、当時先生の講義をどこまで理解し得ていたかは、甚だ心許ないしだいである。しかし、学生運動の窓から労働組合運動を勝手に論評したがる性急・生意気な学生にとって、先生の講義は、時に煩わしく感じるほどに歴史的事実と即したもので、詳細・緻密であり、実証的外国研究とはこういうものかと感じさせられたものだった。

その翌年から、私自身は岸本先生のゼミナールに入り、同期の熊沢誠君（現・甲南大学教授）と共に、大学院でも労働問題・社会政策論を専攻することになったので、前川先生とはつかず離れず研究上の教えを受けることになったのである。

先生のお仕事は、大きくいて二つの系統に分けることができるだろう。第1の研究分野は、イギリス労働組合史・労使関係史の研究であり、それは先生の主著「イギリス労働組合主義の発展——新組合主義を中心にして」（ミネルヴァ書房、1965年）を始め、多くの実証的研究論文に結実している。これについては、後で少し詳しく触れたい。第2の分野は、労働・社会問題とそれに対する公共政策の理論的・実証的研究である。「イギリス最低賃金制度の発展過程の一考察」(1)・(2)（経済論叢第82巻第1号，同第3号）などの論文において先進国の状況を明らかにし、わが国については、「中小工業の

実態——泉南綿織物業」(共著、有斐閣、1949)を始め、「中小企業近代化と労働問題」(1963年)、「失業と社会保障」(1963)、「失業対策事業試論」(経済論叢、第90巻第6号)、「高年労働者対策に関する一考察」(経済論叢、第129巻第3号)等の論稿にその一端を見ることができる。なお、先生の現実問題への関心のふかさは、「中小企業における合理化と労働組合」(日本労働協会、調査研究資料 No. 51)をはじめとする多くの調査報告書を生み、また数多くの時論的論文を生んだ。さらには情報化時代を迎えて、マイクロ・エレクトロニクス機器の導入に関する京都府労働経済研究所の調査を指導されることにもなったのである。

さて、ここでは先にあげたイギリス研究について触れてみたい。

先生は、戦後第1期を担った研究世代の問題意識を色濃く共有していたので、日本経済の特殊な構造および労働組合運動の「特殊日本的脆弱性」が常に意識されていたといっ  
てよい。われわれが講義でも拝聴したイギリス新組合主義の研究は、のちにまとめられ、先生の主著となった。この著書の冒頭において、先生は「構造的な歪みを持って発展してきた日本資本主義は、労働組合運動に特殊性を付与してきた」「わが国労働組合の理論的未成熟、運動経験の蓄積の浅さは、外国労働組合から吸収して、補完されることが必要である。すなわち、資本主義の発展に対応する労働組合発展の一般的法則性が把握され、それにもとづくわが国労働組合の特殊性が認識されて、その発展も期しえられる」と述べられた。

このように、「企業別労働組合」という日本の労働組合の特殊な組織形態を国際的労働組合発展の教訓に照らして批判的に検討し、その弱点の克服に資するというきわめてアクチュアルな問題意識を秘めて先生の研究は続けられたといっ  
てよい。こうした問題意識に立って、先生が19世紀末葉に始まるイギリス「新組合主義運動」(ニュー・ユニオンイズム)に研究の焦点を絞ったことは注目に値する。すなわち、企業別組合の持つ排他的性格を鋭く意識することから出発して、日本においては時に「労働組合のモデル」として美化されかねないイギリス職能別労働組合(クラフト・ユニオン)の限界、熟練工のみの排他的労働組合としての限界をいち早く見抜き、運動史の現実の中でこれの克服を試みた「新組合主義運動」の歩みを辿ろうとされたのであった。

こうした問題意識に支えられた著書では、主として新組合主義運動の中で登場してきた「一般労働組合」(ゼネラル・ユニオン)という新たな組織形態に注目して、その機

能・政策と運動形態を分析することに主眼がおかれた。その過程で、なによりも重要なことは、資本主義の発展段階に規定された労働過程・労働市場の変化に対して、不熟練・低熟練の一般労働者についても労働組合機能を追求しようとするとき、必然的に「一般労働組合」という新たな組織形態が生み出されるとして、労働組合の機能分析から組織形態分析へという視角を確立されたことであった。

その後この領域での先生の研究は、さらに視野を広げることになる。「労働組合機能と労働組合組織—イギリス労働組合を中心として」（岸本英太郎編「労働組合の機能と組織」所収、1966年）では、イギリス本国での新たな研究動向を吸収して、新組合主義運動をゼネラル・ユニオンという新たな組合組織の動向だけに限定せず、既存のクラブ・ユニオンの変革をも含む労働組合運動全体の大きなうねりとして、よりダイナミックに捉えることになった。

一方、「利潤分配制度と労使関係—イギリス独占移行期における労使関係変容の一面」（経済論叢 第98巻第5号）、「19世紀後半期のイギリス使用者団体」（経済論叢 第102巻第4号）、「イギリス労働組合運動と労働管理」（経済論叢 第105巻第4・5・6号）などにみられるように、資本・経営サイドの主体的動向を分析し、従来の労働組合運動史的方法を越えて資本と労働のせめぎあいを本格的に扱う真の「労使関係史」の構築へと歩みを進められたのであった。この研究が集大成されなかったことは、われわれにとっても返すがえすも残念なことである。

ところで、前川先生のお仕事には、もう一つ新たな分野が開けつつあったといえてよい。それは、東南アジアの社会・労働問題に関するものである。1970年代に入り経済の本格的国際化が進展するにつれて、前川先生は東南アジアの経済・社会・労働の実態に強い関心を示されるようになった。この関心が、「タイ労使関係とその問題点」（アジア社会問題研究所、「アジアと日本」第10号）、「東南アジアの社会と生活」（「労働調査時報」第691号）などの論稿を生むことになったが、先生にとってこの分野は、未だ開拓途上のものとして残ったといわねばなるまい。ただちなみにいえば、先生のこうした関心は、京都大学における先生の大学人としての歩みとも一体のものであり、先生は京都大学の国際交流委員として東南アジア諸国の大学・研究機関との研究交流を熱心に進められ、また東南アジアからの留学生の受け入れとその学業支援に大きな力を発揮された。先生のこの姿勢と温かい人柄に惹かれて、一時期、アジアからの経済学部留学生の

多くが先生の下に集まったのである。

先生は日頃どのような場でも、誰に対しても率直で磊落な態度を示されたが、その背後には常に柔軟な感性と生まれながらの京都人としての繊細な気配りを秘めておられた。そうした先生の人柄こそが、学問の垣根を越え、さらには大学という場を越えて多くの親しい友人や後輩をもたれることになった由縁だと思われる。今は心から先生のご冥福を祈りたい。